

望天 観天

新春特別

2030年ノウフクの夢

旧友からウエブ飲み会に誘われ、深酒して爆睡し夢を見た。

2030年の正月になっていた。10年ほど前に、日本では、SDGsが一種の流行になっていたなあ、そういえば今年が目標年だったな。誰もが成長の恩恵を享受でき、居場所と出番のある経済社会を創るんだったよな、と思いつつ新春の新聞を見ると、「農福連携の10年」という記事を見つけた。

政府が19年に農福連携等推進ビジョンを取りまとめたからの動きを特集した記事だ。当時の「知らない、踏み出せない、広がらない」という課題は克服され、農業、福祉の両面でノウフクは太い進展したと書かれている。

ノウフクに取り組む農業経営では6次産業化やスマート農業も着実に進展し、直接雇用される障がい者はここ数年毎年1000人を超える。全国の産地では野菜や果樹の収穫作業や出荷に向けた小分け、包装など手間のかかる仕事は福祉作業所からの施設外就労に多くを頼っている。実りの秋の果樹園で多くの障がい者が立ち働く姿は風物詩にもなっている。

一方、福祉サイドも負けてはいない。全国の1万5000の福祉作業所の半数以上がノウフクに取り組んでおり、都市部でも少子化で廃校になった小中学校の校舎に閉鎖型の植物工場ができ、障がい者によって新鮮な野菜が周年生産されている。活力が低下して耕作放棄地の増加に苦しんでいた中山間地域でも、ノウフク事業体の頑張りで経済循環が回復してきている。

経済界でも大きな変化があった。障がい者雇用が経営の足枷あしかせになるのではないかというマイナスの意識が払拭ふっしょくされ、事業革新や企業価値向上のため積極的にノウフクを実践する企業が急増しているのだ。さらにノウフクはこの10年で対象分野を教育、高齢者福祉、社会的弱者の救済などにも広げ、SDGsが謳っていた社会創りに向けて大きな貢献をしている。

夢から醒めた。夢は必ず叶うのだ。まずは行動。今年も頑張るぞ！



皆川 芳嗣

一般社団法人日本農福連携協会 会長

みながわ よしつぐ

1954年福島県生まれ、78年農林水産省入省、2015年事務次官で退官、16年から株式会社農林中金総合研究所理事。厚生労働省の事務次官を務めた村木厚子氏らと共に農福連携の推進に当たっている。20年からは農林水産省に置かれた農福等応援コンソーシアムの会長も務めている。